

1 節 18 世紀の日本における生産と流通
行き交う人々と物産

◆ 学習のポイント

18 世紀の日本では、幕藩体制が安定すると共に、農業生産が拡大し、諸産業が発展した。生産された年貢米や特産品を流通させる交通網が発達し、商業や金融が活発になり、現在につながる経済活動の原型が生まれたことをつかませたい。

■ 第 1 の問いと展開例

「18 世紀の日本では、どのように手工業製品が生産され、取引されていたのだろうか。」

グラフ「耕地面積の拡大」から

「日本の歴史の中で、耕地面積が一番拡大したのはいつの時代だろう。」

江戸時代初期から中期、すなわち 18 世紀にかけての約 150 年間で耕地面積が約 2 倍になっており、日本の歴史上最も拡大が著しかった時代である。近代以降、20 世紀前半には 500 万町歩（北海道を入れて約 600 万町歩）を越えるようになるが、土木機械などがなかったころに、これだけの拡大は目覚ましいものがある。これを元にして、「生産の拡大は農民の生活にどのような変化をもたらしたのだろう。」「農業やそれ以外の産業にはどのような変化が起きたのだろう。」と投げかけて、関心を深めることができるようにしたい。

農業生産の拡大

❓ 発問例

表「おもな名産品」から

「それぞれの名産品は、現在どの都道府県で生産されているのだろう。知っているものをあげてみよう。」

「自分の住んでいる地域で名産品となっているものには、どのようなものがあるのだろう。」
※経済産業省ホームページ（「伝統的工芸品」）

挿図「工場制手工業のようす」から

「今の工場と似ているところと違うところをあげてみよう。」

「原料となる綿花はどのようにして手に入れたのだろう。完成した綿製品はどのようにして販売したのだろう。」

◆ 指導上の留意点

農業生産拡大の要因として、地曳網で大量捕獲された鱒から生産された干鰯が使用されるようになったことなど、各産業の発達が相互に関係し合っていたことに気づかせたい。また、国内の耕地面積も江戸時代の開発がほとんど進んだことや、各地の名産品生産も多くがこの時代に始まったことを通して、江戸時代の経済成長が近代化の基礎となったことに気づかせたい。

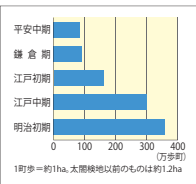
1 節 18 世紀の日本とアジアの経済と社会

18 世紀のアジアは、清（中国）やインドの手工業生産技術の進展により、さまざまな物資が生産されるようになった。アジア地域内で活発な取引がおこなわれ、日本の物産も広く取引された。品質の高いアジアの物産を求めて、ヨーロッパ人はアジアの国々に来航した。

1 18 世紀の日本における生産と流通

行き交う人々と物産

18 世紀の日本では、どのように手工業製品が生産され、取引されていたのだろうか。



▲耕地面積の増大 江戸時代前期は新田開発がさかんて、なかでも享保年間の耕地面積の増大はいちじるしかった。

Table listing various products and their production locations in Edo-period Japan. Products include silk, cotton, paper, and various types of rice and fish products.

▲おもな名産品

いりこ（干しナマコ）・干鰯・フカヒレを依物三品とよび、ほかに昆布やスルメ・カツオ節などの海産物を依につめて輸出した。

農業生産の拡大 日本では 17 世紀中ごろ、治水工事や新田開発が活発におこなわれ、耕地面積はおおよそ 2 倍に拡大した。また、農具や肥料の発達によって農業技術も進歩し、石高は飛躍的に増大した。農家の取入も増え、農民の生活水準も向上した。江戸時代初期に約 1200 万人だった人口も、江戸時代末には 3200 万人にまで増加した。

江戸幕府は当初、商品作物の生産を制限したが、のちに緩和され、全国各地で綿花や菜種・たばこ・野菜などの商品作物がさかんに栽培されるようになった。出羽の紅花や阿波の藍など地域性のある商品作物も栽培された。また、絹織物では京都の西陣織、綿織物の久留米紬、麻織物の越後縮、和紙では越前の奉書紙、陶磁器では尾張の瀬戸焼や肥前の有田焼、灘・伊丹の酒造、野田・銚子の醤油などが代表的な名産品となった。繊維製品を担保にして商人たちは、農民に道具や材料を前貸して、生産された商品を買取る問屋制家内工業や、さらに 19 世紀に入ると、工場に農民を集めて分業で働かせるマニファクチュア（工場制手工業）も出現した。

林業や漁業・鉱山業・製塩業などの発達もめざましかった。地曳網によって大量に捕獲された鱒が干鰯や鰯として金肥（金銭で買う肥料）に使用され、農業生産を拡大させるなど、諸産業の発展は相互に関係しあっていた。また、海産物の依物は清にむけてさかんに輸出された。

板書例

【課題】18 世紀の日本では、どのように手工業製品が生産され、取引されていたのだろうか。

- 農業生産の拡大
耕地面積の拡大・農業技術の進歩…江戸時代中期→人口の増加（1200 万人→3200 万人）
商品作物（綿花・菜種・藍など）の栽培
名産品の生産
問屋制家内工業やマニファクチュアの出現
林業・漁業・鉱山業・製塩業などの発達



▲江戸時代の交通図

交通の発達

江戸の品川から京都までの東海道、江戸から近江の草津までの中山道など五街道が開かれ、河川交通では富士川・保津川・高瀬川などが舟倉了によって開削され、物資の輸送に貢献した。海上交通では菱垣廻船や樽廻船が大坂・江戸の南海路を定期的に往復し、大坂から江戸へ木綿・油・酒などを運んだ。また、河村瑞賢により東廻り海運（奥羽の日本海岸から江戸へ）と西廻り海運（日本海沿岸から下関を経て大坂にいたる）が整備され、全国的な海上交通網が完成した。

商業金融の発達

江戸・大坂・京都は三都とよばれ、とくに繁栄した。江戸は最大の城下町で 18 世紀には人口約 100 万人に達した。江戸・大坂には諸藩の年貢米や特産品を保管する蔵屋敷が置かれ、旗本・御家人の禄米の売却や金融をおこなう札差（蔵宿）、また特産品の保管・販売をまかされた蔵元・掛屋などの商人が成長した。貨幣には金・銀・銭の三貨があり、貨幣間の両替や為替・貸付・預金などをおこなう両替商が三都で発達した。米の最大の集散地であった大坂の堂島の米市場は、全国の米相場の値段を決めるほどであった。商業取引の拡大は、商人に問屋・仲買・小売の区別を生んだ。とりわけ、問屋や仲買は株仲間という同業組合をつくって利益を独占したが、のちに幕府はこれを認め、運上・莫加などの営業税をとった。



18 世紀の日本では、農業・交通・商業が発展した。この要因を考えてみよう。

○交通の発達

陸上交通…五街道（東海道・中山道など）
河川交通…富士川・保津川・高瀬川などの開削
海上交通…菱垣廻船・樽廻船（江戸～大坂）、西廻り海運・東廻り海運

○商業金融の発達

三都（江戸・大坂・京都）の繁栄
商業の発達…札差、蔵元・掛屋（年貢米などの売却）
問屋・仲買・小売→株仲間の結成

交通の発達

❓ 発問例

挿図「江戸時代の交通図」から

「東海道が通っていたところは、現在はどのような交通路となっているのだろうか。」

「自分の住んでいる地域で、当時はどのような交通が行われていたのだろうか。」

「陸上交通、河川交通、海上交通のそれぞれの交通路を現在と比較した場合、共通点と相違点を考えてみよう。」

「全国各地にある都市は、どのようにして発達してきたのだろうか。」

◆ 指導上の留意点

国内の交通網については、この時代に現代の基礎ができあがっていたことに気づかせたい。とりわけ、機械的な動力のない時代に、大量輸送は海や河川などを経由した船舶が重要な役割を担っていたことをつかませたい。

商業金融の発達

❓ 発問例

表「三都と世界の主要都市の人口」から

「18 世紀の日本と世界の主要都市の人口を比較して、どのようなことが言えるだろうか。」

「都市の発達は、その地域や国の経済活動とどのような関係があるのだろうか。」

挿図「堂島の米市場」から

「人びとは、何のために集まっているのだろうか。」

「江戸時代、米市場が重要な意味を持ったのはなぜだろう。年貢が米で納められていたことと結びつけて説明してみよう。」

「江戸時代に生まれた流通の仕組みである問屋・仲買・小売は、現在ではどのようになっているのだろうか。」

◆ 指導上の留意点

都市はさまざまな経済活動の拠点であり、都市の発達と経済活動の発展の関係をつかませたい。その点から、18 世紀の日本はヨーロッパと比較しても、かなりの水準で経済活動が進んでいたことに気づかせたい。また、江戸時代は年貢は米納であり、米は食料としてだけではなく、一種の通貨の役割も果たしていたが、それを換金することでさらに高度な貨幣経済が成長した。堂島の米市場では、世界でもいち早く先物取引が行われており、日本国内限定ではあったものの高度な経済システムが形成されていたことにもふれたい。その上で、流通機構も現在の基本的な仕組みはこの時代にできあがっていたことに気づかせたい。

■ 第 2 の問いと展開例

「18 世紀の日本では、農業・交通・商業が発展した。この要因を考えてみよう。」「農業生産の拡大と商品作物生産の拡大の関係を説明してみよう。」「農業生産や名産品生産の拡大と諸産業の発達の関係を説明してみよう。」などの発問を通して、それぞれの産業の関連性について考察を深められるようにする。